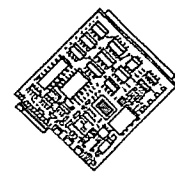


アメリカにおける情報化社会と宗教

阿部美哉



情報化時代と脱規格化

情報化時代とか情報化社会という言葉が流行語になってからかなり時間がたった。その元祖ともいべきマーシャル・マクルーハンは、電機通信の発達により地球上のすべての人間が一つの村の一員としての意識を持つようになると考え、そのような状況をイメージ化して示すために、「グローバル・ビレッジ(地球村)」という表現を提唱した。ズビグニュー・ブレジンスキーは、これからの人類は、「テクネトロニック・エイジ(技術・電子工

学時代)」に突入しつつあると観察したし、ダニエル・ベルは、情報に基づいた知的技術が支配する「ポスト・インダストリアル・エイジ(脱工業化社会)」の到来をとなえた。またピーター・ドラッカーは、「財やサービスでなく、アイデアと情報を作り出し、流通させるのが知識産業であり、知識が技能にとつてかわって経済発展の推進力になり、知識にたずさわるものが権力を握るような「ノレッジ・ソサエティ(知識社会)」という構想を提唱した。

一九七〇年に『未来の衝撃』において「スーパー・イ

ンダストリアル・ソサエティ(超産業社会)」の到来を宣言したアルビン・トフラーは、ついで一九八〇年に『第三の波』を出し、文明を農業段階の第一の波、産業段階の第二の波、そして現在はいよいよつある第三の波という三つの段階にわけ、第三の波の特徴を情報化時代ととらえた。

トフラーは、「第一の波による変化が起こる以前、人類の大半は小グループにわかれ、各地を放浪しながら生活しており、採集、漁労、狩猟、牧畜で食料を獲得していた。それがある時点、ごくおおよそにいつて一万年ほど前に農業革命が始まり、地球上に徐々にひろまっていくなるとともに、村や集落や耕作地ができ、新しい生活様式がひろまっていた。……第一の波の時代は……一六五〇年から一七五〇年頃までほかの勢力の挑戦を受けることなく、地球上を支配していた。そしてこの頃から、第一の波の勢力がおとろえはじめ、それと期を同じくして、第二の波が活力を発揮しはじめた。第二の波の産物である産業文明が、今度は地球を席卷し、ついにその頂点まで登りつめた。

歴史上もつとも新しい第三の波への転回点は、アメリカの場合、ほぼ一九五五年から六五年にかけて起こっている。ちょうどこの十年のあいだにホワイトカラーとサービス産業で働く人々の数が史上はじめてブルーカラーの数をしのいだ。大幅なコンピュータの導入、ジェット機による観光旅行ブーム、避妊ピルの普及、そのほか多くの衝撃的な変革が相次いだのも、この十年間であつた。この十年間こそ、アメリカにおいて、第三の波がその勢力をたくわえた時期だったのである。……核家族の崩壊、地球自体のエネルギー危機、新興宗教の隆盛、ケーブル・テレビジョンの普及、フレックス・タイム制の一般化、有給休暇や健康保険など……は、産業主義の終焉と新しい文明の出現を意味している」と述べている。われわれの生活意識は、歴史のパラダイムがトフラーのいう第二の波から第三の波へ転換すると、根底から変化してしまう。われわれは、それぞれ頭の中で、現実に対応するためのモデルをつくりあげているが、そのモデルが変わるのである。マスメディアが出現する以前、第一の波の時代には、人々は狭い村の中で成長し、もっぱ

ら学校の教師、僧侶、村長や役人、それに年長の家族などから与えられる情報によって現実に対応するためのモデルをつくっていた。ところが第二の波の時代になると、情報源は一挙に増え、新聞、大量の発行部数を持つ雑誌、ラジオ、さらにはテレビから情報が与えられるようになった。マスメディアは、強大な影響力を行使し、社会思潮を形成する様々なイメージを規格化した。マスメディアは、一定のイメージを集中的に大衆の心に植え付け、産業主義にもとづく生産方式にとって不可欠である人々の行動の規格化を助長したのである。

ところが第三の波は、産業社会の規範である規格化を超越する。第三の波が到来すると、情報量の爆発的な増加と情報伝達手段の著しい多様化がおこり、メディアもまた脱規格化する。そこで、マスメディアは、情報の独占による支配権力を失うことになる。

事実、アメリカの新聞の総発行部数は、一九七三年に六千三百万部に達したが、それ以降は減少をはじめ、以後年々下降線をたどっている。一九七〇年から七七年までのあいだに、アメリカの人口が一千四百万人増加した

のに、発行部数の上位二十五誌の総数は、四百万部減少し、『ライフ』『ルック』などの大衆雑誌が廃刊に追い込まれていった。これと時を同じくして、特殊対象や特定地域を狙った無数の新しいミニ雑誌が登場してきた。いまやあらゆる組織、機関、政治団体、宗教団体などが、早くて手間のかからない安価な新型印刷機を使って自前の出版物を発行している。

放送メディアも例外ではない。一九五〇年から一九七〇年までの間に、アメリカのラジオ放送局の数は、二三三六から五三五九にふえた。いいかえると、人口が三五%伸びる間にラジオ放送局は二二九%増加し、一局あたりでは、六万五千人から三万八千人に減ったことになる。そして一九七七年には、最も多くの大衆を動員できるメディア、テレビが揺らぎはじめた。『タイム』は「すべてがおしまいだ。放送や広告業界の幹部連中は、いらいらしながら数字をのぞきこんだ……彼らは、いまだこういう事態が起ころうとしているのか、半信半疑だった。歴史上はじめて、テレビ視聴時間が低下しはじめたのだ」と伝えた。また、NBCの前社長は、アメリカ三大ネッ

トワークの市場占有率が一九八〇年代末には、五〇%以下に落ちこむだろうと予告した⁽²⁾という。

テレビ、なんぞネットワーク・テレビという第二の波を支配したメディアが、ケーブル・テレビ、衛星通信、光ファイバー通信、ビデオその他のメディアの発達による挑戦を受け、一般視聴者を脱規格化の方向に導き、小規模なグループを多数つくりだしてしまったのである。三大テレビ・ネットワークの比重低下にことに重要な役割を果たしたのは、宗教テレビ放送局や公共テレビ放送局、地方テレビ放送局、娯楽、スポーツ、ニュースなどに特化された放送局の衛星による放送番組の配給である。

各々数十というチャンネルをもち、全米の半数以上の受信者にはりめぐらされた何千というケーブル・テレビ局に衛星を利用することによって僅かな経費で番組を供給することができるようになったため、テレビ説教師など特殊目的の番組供給者が、寡占的なネットワークから独立に、個別化された目的別放送の、自前のケーブル・テレビ放送網をつくることができるようになったのである

る。

テレビ放送始動期の宗教番組

産業化社会の尖兵としてのラジオ、情報化時代の先鞭をつけたラジオからテレビへのメディアの主役の転換、テレビ放送と宗教番組の関係およびテレビ説教師ないしいわゆるテレビバングェリスの文明史的意義を理解するためには、上記のような時代の変化についての認識を欠くことはできない。

アメリカで初のラジオ放送が行われたのは、一九二〇年。そしてこれを最も良く利用し、ニュースの独占を實現したのがフランクリン・D・ルーズベルトであったことは、デビッド・ハルバースタムの健筆によって、見事に描きだされている⁽³⁾。

やがて一九四〇年代の後半になると、メディアの主役はラジオからテレビに移行する。ラジオ全盛期の一九四八年に、筆頭局NBCの日曜日午後七時のスーパースターで最高の聴取率を記録していたジャック・ベニーのCBSによる引き抜きが行われ、多くの芸能人がこれに

追隨した。翌一九四九年には、スターを集めた人気番組を取りそろえた各局のテレビ番組が一斉にスタートし、以後急速に三大テレビ・ネットワークによる広告業界における寡占状況がすすんでいった。ニールセン調査によれば、午後九時から深夜までつけられていたテレビ受像機の数は一九五二年一月に初めてラジオを追い抜き、テレビの総広告収入は、年々前年比五〇%もふえ、金のなる木は大きくなる一方だった。⁽⁴⁾

テレビ時代の始まりとともに、公共放送番組への時間配分が連邦放送・通信委員会(Federal Communications Commission)のテレビ放送認可の条件の一つであったこともあり、主要ネットワーク局でも、地方局でも、その時間枠の番組として若干の宗教番組が制作、放送されることになった。テレビの宗教番組は、ラジオの宗教番組が長年にわたって定着していたことからすれば、新しい現象ではなかったともいえる。テレビ時代の当初に、テレビ局が呼びかけ、呼びかけに応じて宗教番組をやったのは、プロテスタント、カトリック、ユダヤの主要教団であった。

すでにラジオの経験から、三大ネットワークなどでは、他派の中傷や宗教的奇跡、呪いに満ちた説教などを放送したいといってくる申し入れに対処するための戦術として、評判の高い主流宗教団体の連合体、すなわち全米カトリック協議会、全米キリスト教会会議およびアメリカ・ユダヤ教会議だけしか相手にしないという慣例をもっていた。

三大ネットワークのやりかたは、制作施設、技術サービスおよび若干の資金をこれらの団体が番組を作るのに提供するか、あるいは各ネットワーク局が宗教番組を作り、その際にこれら宗教団体からしかるべき聖職者をコンサルタントとして派遣するかのいずれかであった。これらの宗教番組は、放送局の設置認可・電波割当てに際して連邦放送・通信委員会が要求するパブリック・サービスのための時間に放送する、スポンサーのつかない自主番組としてネット局に配給された。⁽⁵⁾

このやりかたは、テレビ放送局にとってみると、認可条件を満たすための公共的番組の確保という点および宗派色の強い、論争点をはらんだ持ち込み番組を避ける手

法という点で都合の良い仕組みだった。他方、主流宗教団体にとっても、無料のテレビ放送時間と全国をカバーするネットワーク・テレビ放送局の技術的、財政的な協力をえたことは、特権的なメリットになっていた。一九五〇年代は、三大ネットワークとプロテスタント、カトリック、ユダヤ教の主流による宗教番組の全盛期で、CBSの「足もとを照らす」、ABCの「目標」、NBCの「信仰のフロンティア」などの番組が長く続けられ、受賞の対象になったりもした。テレビ時代初期における宗教放送は、主流による寡占を原則とする産業社会型、第二の波型のシステムによって構成されていたといえよう。

他方、幕屋伝道の伝統をひく独立の伝道者たちも、かねてから活発にラジオを利用しており、テレビ時代をむかえて新しいメディアに関心を持ったけれども、三大ネットワークはもとより、地方放送局からも無料放送時間を割当ててもらうことはできなかった。彼らは、のちに有料で放送時間を買取り、テレヴァンジェリストとよばれるテレビ説教師になったのであるが、その多くは、

福音主義的なファンダメンタリスト・プロテスタントで、全米カトリック協議会とか全米キリスト協会会議のような主流とされた宗教団体からは見下されており、これらの団体のような社会的信用も宗教放送の実績もなかった。彼らは、テレビ放送局のネットワーク化による寡占化のプロセスの中で、その枠組から外れ、経営的な困難に直面して、時間の切り売りや局自体の中に身売りをするものがでてくるにつれて、これらに飛び付いたのである。⁽⁶⁾

代表的テレヴァンジェリストとして、ジェフリー・ハッデンは、ビリー・グレアム、レックス・ハンバード、オーラル・ロバーツ、ジェリー・ファルウエルの四人をあげ、これら四人でその他すべてのテレビ説教師に匹敵する視聴者数を確保していると述べている。

しかし、ビリー・グレアムは、その他のテレヴァンジェリストとは質的に異なっている。グレアムは、一九四九年以来、新聞王ランドルフ・ハーストの支援を受けて、テレビ・クルーセードを企画制作し、ネットワーク・テレビ局のゴールデン・アワーを買取り取って特集番組とし

て放送してきた。彼は、その他のテレヴァンジェリストと違って、長期にわたる定時番組をやったことも、自分の宗教放送局を持ったこともない。長い間、宗教放送といえはグレアムが思い起こされるほど、彼は有名だが、そのアプローチはむしろ体制との癒着であり、社会悪については意図的に触れることを避けていた。グレアムのテレビ・クルーセードは、テレヴァンジェリストというよりは、主流・ネットワーク型宗教番組とテレヴァンジェリストの宗教番組との中間に位置づけられるように思われる。

一方、レックス・ハンバード、オーラル・ロバーツ、ジェリー・ファルウェルなど、代表的なテレヴァンジェリストは、いずれも体制にしばられていない。彼らは独立の一匹狼で、企画立案、大勢のスタッフとの様々な会議、番組のレビューと編集、出版、宣伝、寄付募集などのための諸活動にエネルギーの大半を費やし、その生活スタイルは、企業の経営者に酷似している。

テレビは、資本集約的な産業であるから、テレビ説教師はそのカリスマ性と大衆へのアピールを金銭に置き換

える能力を要求される。番組を制作し、配給するために支払う金がなければ、テレヴァンジェリズムは成立しない。彼らは、主流大教団とちがって、無料放送時間という特典も、社会的なプレステイジという資産ももっていなかったから、放送局から商業的放送時間を買入れるための資金を視聴者から引き出さなければならなかった。したがって各テレヴァンジェリストの組織の主要部分は資金調達部門であって、ピーター・ホースフィールドの研究によると、レックス・ハンバードでは予算の三五%、ジェリー・ファルウェルではその二四%が寄付の勧誘と処理のために計上されていたという。こうして彼らが有料放送時間を買って送り出した宗教放送番組は、不利な条件を乗り越えて、一九五九年には、テレビの宗教時間の五三%、一九七七年にはその九二%を占めるにいたったのである。

たしかに、いわゆるテレヴァンジェリストの有料宗教番組は、一九六〇年代および一九七〇年代に規模および数の上で著しい伸びを示したが、宗教番組全体の総量はあまり増えていない。北米放送協会の一九七一年の調査

放送網別宗教番組放送局数一覧

	1973	1974	1975	1976	1977	1978	1979	1980	1981
<u>三大ネットワーク</u>									
ABC	104	108	115	99	92	69	62	67	74
CBS	85	94	71	?	?	?	39	33	33
NBC	144	114	134	125	88	98	91	73	59
<u>テレヴァンジェリスト</u>									
オーラル・ロバーツ	151	157	168	172	174	176	170	177	185
レックス・ハンバード	155	168	189	203	213	205	206	209	201
ロバート・シューラー	29	28	60	85	123	117	144	161	165

*三大ネットワークについては NCC リポート、テレヴァンジェリストについては ニールセンにより、合成した。

によると、宗教番組に放送時間を売り始めたテレビ放送局は、三大ネットワークの系列からはずれた地方局で、自ら番組制作能力を十分に持たないものが多かったが、それらの経営者がどの程度宗教番組を放送するかについて決定する際には、社会の興味や反応以上に他の放送局経営者の態度との横ならび意識であった。そして、一九七〇年代になると、これまで公共サービスの時間として無料で放送していた宗教番組をその放送時間に対して代金を支払ってくれるテレヴァンジェリストの番組におきかえる傾向が加速した。下の表は、三大ネットワークの宗教番組と三人の代表的なテレヴァンジェリストの宗教番組を放送している放送局数の推移を年度をおって対比してみたものである。

一九六〇年に、連邦放送・通信委員会が公共の利益のために放送を統制するという方針を変更し、放送局による放送時間の販売を自由化した。それ以後、宗教番組の制作者を営利企業とみなし、宗教番組に関しても番組制作者に放送時間を売りたいと考える放送局の数が確実に増加している。こうした放送番組提供者の変化は、宗教

番組の内容の変化をもたらした。一言でいえば、宗教テレビは、アメリカの文化、伝統としてのキリスト教的市民宗教の表現からプロテスタント福音主義やファンダメンタリストのセクツ的救済観の表現に変化した。

テレヴァンジェリストの進出は、第二の波のメディアとしてその極致ともいべきテレビに、第三の波の挑戦を与える要素を含んでいた。いいかえれば、テレヴァンジェリストは、情報の寡占化を強力に指向していたテレビというメディアを、情報の多様化にむけてのトウールに変質せしめたという一面をもっていた。彼らの勃興は、体制批判・反主流勢力の成立ないし価値観の多様化を示唆した。また彼らは、主張を現実社会に反映させ、この世における幸せを保障するため、その妨げになっていると思われる政治の現状を批判し、その変革に乗り出したのである。

テレヴァンジェリスムと政治

さて、宗教がアメリカの政治過程において果たした役割は、決して小さくない。キリスト教の価値と聖書の教え

は、ジョージ・ワシントンを初めとするいわゆる建国の父たちによって国の礎と考えられた。そしてアメリカの諸キリスト教会は、奴隷制の是非を問うた南北戦争、禁酒運動、女性の参政権運動、ニューデイルの下での国民経済の再構築運動、一九六〇年代の市民権運動など、アメリカ政治史上最も重要な展開に深くかかわってきた。プロテスタント、カトリック、ユダヤ教をふくむ諸宗教は、いわゆる「プロテスタント倫理」の源泉として、アメリカにおける政治活動の目標と行動指針を提供してきた。

ことに近年、ファンダメンタリスト的な白人プロテスタント集団が極めて保守的な政策を標榜して積極的に政治に参画する活動が顕著になっている。ジャーナリストの多くや一般市民の中には、このような宗教集団の政治活動は、政教分離を旨とするアメリカ憲法の精神に反し、信教の自由のよって立つ基盤を危うくするおそれがあるとして非難する向きもある。しかし一方には、こうした動きを、アメリカの庶民倫理の復興の兆候として、高く評価する向きもある。

従来個人としての救済の体験を重視し、聖書を字義通り

り遵奉する立場をとり、宗教を優れて個人の信仰の問題としてとらえてきたファンダメンタリストたちは、政治活動を含むこの世の俗事は純粋な精神生活にとっては本質的に邪魔物であり、教会がこの世の俗事にかかわる必要はないという考え方であった。一九八〇年代における宗教集団の政治活動においてとくに注目すべきことは、彼らが、急きよ積極的^{（8）}に政治行動に出るようになったことである。しかも彼らが、支持政党ないし支持する政治家をテレヴァンジェリストたちの示唆に従って決定するために、有力な票田になることである。

ファンダメンタリストたちの政治的無関心を変えさせ、政治への積極的参画を誘導した一つのきっかけとして、ジェームス・ライクリーは、ジミー・カーターの出馬をあげる。ライクリーによれば、彼らは、ジョン・F・ケネディが出馬した時にカトリックが熱狂的に応援したように、信仰に目覚めたバプティストを標榜したカーターを同信者として応援したのである。一九七六年の大統領選挙では、ワイリッチ、フィリップス、ヴィガリー

などの政治プロがテレヴァンジェリストたちにダイレクト・メール、メディア操作、草の根組織のコンピュータ化など近代的な選挙戦術の指導を行い、彼らの支援がカーターの僅差の勝利に大きく貢献したという^{（8）}。

しかし彼らは、まもなくカーターに失望する。一九八〇年の大統領選挙では、彼らの多くは、共和党に乗り換え、そのレーガン支持率は、約六〇%だったと推定されている。一九八〇年選挙における宗教右翼の影響については、様々な見方があるが、少なくとも不景気の下で行われた一九八二年の中間選挙では、白人福音主義者の大半は不活発で、信条的には従来からの民主党支持の立場に戻ったといわれている。

一九八四年の選挙では、ふたたびアメリカ社会の危機がプレイアップされた。離婚の増加、犯罪率の上昇、未婚の母の急増、麻薬の猖獗^{（9）}、ボルノの氾濫などによってアメリカ的な生活が崩壊に瀕しているのは、大学やメディアや連邦政府や連邦最高裁が「世俗的ヒューマニズム」の哲学を流布しているためだという、テレヴァンジェリストたちによって行われる説教が多くの白人福音主義フ

アンダメンタリストたちの共感をえた。

ジェリー・フォルウェル、バット・ロバートソンなど有力なテレヴァンジェリストたちは、ことに連邦最高裁判所が一九六二年に公立学校での祈りを違憲とした判決および一九七三年の妊娠中絶を合憲とした判決を世俗的ヒューマニズムのシンボルとして攻撃する。テレヴァンジェリストたちは、世俗的ヒューマニズムの提唱者たちが社会を牛耳り、国政を支配していることが諸悪の根源であるという。彼らは、世俗的ヒューマニズムを打破するためには福音主義者たちが結束して政治的に立ちあがって、世俗的ヒューマニストたちを権力の座から追放しなければならぬと主張し、福音主義の信奉者たちに投票登録をして政治参加するように呼びかけ、特定候補の推薦を行う。

テレヴァンジェリストたちは、一九八四年の大統領選挙では、従来以上に活発な政治的発言を行い、ロナルド・レーガンと共和党の地滑りの勝利に大きく貢献した。テレヴァンジェリストたちが推進した投票登録は、新しい有権者を獲得する競争において圧倒的な成果を収めた。

一九八八年の大統領選挙におけるブッシュの地滑りの勝利は、マイケル・デューカキスのイメージを世俗的ヒューマニズムと二重移しにしたキャンペーンによるところが大きい。汚いイメージ作りの効果については、「タイム」を初めとするジャーナリズムが皮肉をこめて報道した通りだと思われる。

白人の福音主義ファンダメンタリストたちは、民主党がカトリック、ユダヤ教徒および黒人の支持を安定的にとりつけていることに匹敵する、共和党の安定票田になるかも知れない。そうなれば、彼らの支持は、共和党が、一九三〇年代に失った万年与党の地位を回復する手がかかりになりうる程の大きなインパクトを与えるかもしれない。人工中絶などの問題では、福音主義ファンダメンタリストたちとカトリックとの連合が成立しているが、それでも、福音主義ファンダメンタリストであるテレヴァンジェリストたちがまゆつば者だと思われることは、否定できない。それにもかかわらず、アメリカの多くの人々が、リベラリズムないし世俗的ヒューマニズムの行き過ぎによってアメリカの倫理の基盤が崩壊の危機

た。ワシントン・ポストの報道などによると、ノース・カロライナ州では、白人福音主義者の登録が三十万人以上増えたのに対し、ジェシー・ジャクソンについてウォルター・モンデールの支持を訴えた黒人教会の呼びかけに応じて登録した黒人の数は約十八万人で、新規登録者のレーガン支持およびモンデール支持の比率は、二対一であったという。しかも彼らの共和党支持は、安定票田化してきたという。

レーガンは、強い反対を押しきって、福音主義者たちに誠実に対処し、その要望をかなり大きく取り上げた。なかんずく公立学校における祈りの復活や人工中絶の問題で福音主義者の主張を支持し、市民権運動からの反対のため取り消さなければならなくなったけれども、いったんは人種差別を行っている教会学校の免税を禁止したカーター政権の決定を覆した。最有力のテレヴァンジェリストの一人、ジェリー・フォルウェルは、こうしたレーガン政権の態度を高く評価し、一九八八年の選挙では、一九八〇年には非難の対象としていたジョージ・ブッシュの支持を表明するにいたった。

に瀕していると憂え、そのために彼らを支持しているという現実を無視することはできない。

従来、福音主義を信奉する中・下流の白人プロテスタントは、投票登録に消極的で、政治に関しては眠れる獅子だった。今後彼らが、従前の姿勢に戻ることはまずあるまい。このグループは、アメリカの有権者の約二割に相当する大票田で、きわめて有力な政治勢力になりうるのである。

テレヴァンジェリストたちが彼らに政治への関心を持たせることに成功した背景には、大学やメディアを占拠し、支配している「世俗的ヒューマニズム」と知識人主流に対する不信感がある。つまり、彼らは、マスメディアを握る主流の宗教家をふくむ知識人階層が世俗的ヒューマニズムを垂れ流したために、今日のアメリカ社会においては、家族の安定性がますます弱くなり、商業娯楽や広告によって享楽主義が煽られ、社会的な鍛練が失われているばかりでなく、「公的な場面」から宗教が分離されるのだと説く。こうした動向に対する拒否反応を糾合して処方箋を提供しているという点において、いか

がわしさのともなうテレヴァンジェリストたちは、庶民的アメリカ人の持つ現代社会の動向に対する不満を代弁しているのである。

世俗的ヒューマニズムと政教分離論

テレヴァンジェリストたちを含む伝統回帰主義者たちは、リベラルな国内政策を推進し、世俗的ヒューマニズムを定着させているのは、特定の担い手であるという認識を深めてきた。佐々木毅は「この担い手は、単に行政府その他で現実影響力を持つているに止まらず、ある特定の価値や文化を分有した特定の集団としてイメージされてくる。それは、行政や文化の領域において圧倒的影響力を持つ集団であり、例えば政策は彼らの分有するある価値に基づいて立案され、マス・メディアによって支持されているのである。彼らは、この集団をニュークラスと呼び、ニュークラスを誤った諸施策の元凶として批判的にすることになる。ところでニュークラスとは何か。ニュークラスとは、……知識人の集団である。……このうち、広い意味での公共部門や大学、研究所、

マス・メディアなどの文化部門に属する知識人が、保守主義者の言うニュークラスであって、……彼らは、シンボル・スペシャリストとして、学問を初め多くの領域での議論をコントロールし、それを通して人々の考えを支配し、政治的に支配する力を持つ」と述べている⁽⁹⁾。

テレヴァンジェリストたちが世俗的ヒューマニズムの具体例として激しく攻撃する対象には、男女平等憲法修正案(ERA)に代表される聖なる家族の観念を否定する女性および性の解放運動の方向とともに、政教分離の行き過ぎがある。公教育と宗教の関係をめぐる問題に関しては、十九世紀の終りに両者を分離し、公教育を世俗化する措置が取られたが、今世紀の前半に公立学校に宗教教育が再び浸透し始め、一九四〇年代から係争が相次いだ。連邦最高裁判所は、基本的に公教育から宗教を厳しく分離する立場をとり、国教制度を防止するため、公立学校における直接、間接の宗教教育を禁止したばかりでなく、宗教教育を行う私立学校と政府との財政的、税制的関係にも厳格な政教分離の確立を求めてきた。厳格な政教分離を説く立場は、合衆国憲法修正第一条を典拠

として、宗教を私事とし、政府の宗教への関与を全面的に禁止することを求めたのである。

反世俗的ヒューマニズム、反リベラル、反主流知識人のテレヴァンジェリストたちは、公教育から宗教が一掃された今日の状況は学校が世俗的ヒューマニズムによって侵されてしまった結果にほかならないと非難する。彼らは、憲法の政教分離の規定を厳格に政教分離の方向に解釈し、学校教育における世俗的ヒューマニズムを推進したのは、公立学校における祈りや教会立学校のスクール・バス運行費の公金による補助を違憲とした最高裁判所の判決であったとみなし、ヒューゴ・ブラック判事に代表される連邦最高裁判所の一連のリベラルな判決が教育の場における世俗的ヒューマニズムの確立に資したのだと判断する。

ニューライトの代表的大立物J・ヘルムズ上院議員によれば、「連邦最高裁判所は、公立学校における自発的な礼拝に子供たちが参加するのを禁止したが、そこから次のような帰結が不可避的にでてくる。すなわち、連邦最高裁判所は、すべてのアメリカ人が自由に宗教活動を

行う権利を侵害したのみならず、合衆国に一つの国家宗教―世俗的ヒューマニズムの宗教―を樹立した⁽¹⁰⁾」のである。

テレヴァンジェリストたちは、犯罪の増加、若者の反抗、離婚の増大、麻薬の蔓延、アイデンティティーの危機、犯罪者の甘やかし、教育の崩壊などの原因は、すべてからく道徳的無秩序を容認し、利己心を奨励する世俗的ヒューマニズムにあると考える。したがって、世俗的ヒューマニズムをアメリカから追放する第一歩として、その国教体制のシンボルである公立学校での祈りの禁止を改めなければならないと主張し、公立学校へ宗教教育を再導入することを要求する。

彼らの主張によれば、昔からアメリカ人は宗教的な国民であったのであり、宗教がその倫理や道徳の維持に重大な寄与をなしてきた。彼らは、六〇年代のニューレフトや対抗文化などに代表されるアメリカの伝統やライフ・スタイルへの反発が社会倫理を解体してしまったと分析した上で、宗教と公教育を単純に分離してしまうのではなく、一定の程度で両者を連携することによりアメ

リカのアイデンティティを再建しようと主張する。

アメリカの危機が経済や政治のレベルを越えて文化の領域にまで至る時、宗教の持つ位置は、圧倒的に重要なものになる。この文脈においてみると、宗教的次元は、テレヴァンジェリストの隆盛に象徴される現代アメリカの保守主義の勃興において、本質的な重要性をになっている。

アメリカの政治基盤としての宗教的次元

テレヴァンジェリストの主張や憲法上の政教分離論とは別の次元で、ロバート・ペラーは、アメリカの政治基盤には、宗教的な次元が内在することを説明した。ペラーは、アメリカには、教会とやらで、そしてそれとは明確に分化されたものとして、精緻かつ高度に制度化された宗教的次元が現実存在していると指摘した。彼は、それを市民宗教と名付け、これを国民的自己礼讃の形式というよりは、国民を超越的な倫理基準に従属させ、そしてその観点から国民に判断基準を与えるものであるととらえた。⁽¹⁾

うに彼の民を導いたというものであった。草創期のアメリカの市民宗教は、アメリカの独立を海の彼方の古い国々からの出エジプトの行為とみなし、独立宣言と憲法を聖典とし、ワシントンをモーゼとしていたのである。そしてこの神話は、ケネディの就任演説にも、ジョンソンの就任演説にも、繰り返しあらわれるのであって、今日に至るまでアメリカの市民宗教の継続的なテーマとなっているという。

次に、国民の意味という最も深い問題を提起した南北戦争を契機として、市民宗教が新たな展開をしたという。ペラーは、アメリカ人にとって国民とは何かという意味を定式化し、それを自らの一身に体現したのが、アブラハム・リンカーンであって、南北戦争とともに、死、犠牲、再生という新しいテーマがアメリカの市民宗教に付加されたと考ええる。

リンカーンのゲティスバーグ演説は、象徴的、聖礼的であり、「ここに生命を捨てた人々の生命を国民は生きるであろう」という言葉による象徴的な死によって、戦場は、それ以前には存在しなかった、象徴的な意味を与

ペラーは、ジョン F・ケネディの就任演説において、大統領としてのケネディが神の名に触れた三つの個所に注目し、彼が何故神に言及したのか、どのように言及したのか、この三カ所で何を言おうとしたのかを理解することによって、アメリカの市民宗教を理解するための手がかりを得ようとする。ペラーによれば、それは冒頭の二段落と最後の段落にあって、演説の中間の具体的な発言を包みこむフレームになっている。それは、神への言及は、公的生活一般においてもこの演説においても、宗教がもつばら儀式上の重要性を持つて示しているという。

ペラーは、公的な宗教的次元は、アメリカの市民宗教と名付けられる一連の信仰、象徴、儀式に表現されており、大統領の就任式は、この宗教ないし宗教的次元の最も重要な儀式的行事であるという。市民宗教の形式と語調は、建国の父たち、とくにワシントン、アダムス、ジェファソンなどによって形作られた。そのテーマは、ヨーロッパをエジプトとし、アメリカを約束の地として、神がすべての国民に光明と新しい社会秩序を樹立するよ

えられ、キリストの死と再生の原型と結び付けられた。そして、殉教の大統領リンカーンは、戦死者、最後の十分な献身を行った人というイメージに結びつけられた。ここから、犠牲というテーマが、アメリカの市民宗教に深く刻印され、南北戦争から生れた戦没将兵記念日の行事によって、このテーマは、儀式上の表現様式を与えられた。そして、公立学校制度が市民的儀式を礼拝として祝うための特に重要な文脈に転嫁されたというのである。

ペラーは、今日の課題として、アメリカの市民宗教と世界の中での責任ある行動の問題を提起する。彼は、アメリカの市民宗教は、アメリカ国民崇拜ではなく、アメリカの経験を究極的、普遍的現実の光りに照らして理解することであり、そのためにはアメリカの市民宗教の中に、活力のある国際的象徴を導入することが必要であろうというのである。

ペラーの市民宗教概念の提唱は、アメリカにおける私的行為としての宗教と公的生活との分離に関する憲法上の課題を超えた、公的な宗教的次元の存在を明確に指摘

した。それは、世俗的ヒューマニズムに対する表面的、形式的な攻撃とは全くことなる意味と価値の次元において、極めて重要な、世俗的ヒューマニズムの対立概念を樹立したと考えられる。

ユダヤ・キリスト教の伝統に立つ宗教的次元は、アメリカ人の社会的、経済的多様性をこえて、アメリカを一つに結合する見えない底流であった。アメリカでは、宗教もまた、その他のアメリカ社会の構成要素と同様に多元的である。しかも、それらは、アメリカ合衆国の成立よりもはるかに長い歴史と信仰の伝統に立っている。そして複数の宗教が併存するからこそ、アメリカの諸宗教は、共通の道義的基準ないし共通の宗教的次元を求めることになった。それが、ベラーによって解明された市民宗教のテーマであった。

むすび

社会は、その公的生活に道義的な基準を欠いては、その活力を維持できないことが明らかである。そうだとすれば、宗教の最も重要な社会的機能が、特定の宗教家の

私的な関心を超越する要素を持つことも自明である。多元的な情報化時代のアメリカ社会においては、宗教家もまた、その他の市民同様に、それぞれの信念に基づいて政治的な発言をする権利と責任を有する。

ただし特定の宗教家ないし宗教集団が個別的、私的な主張に基づいて具体的に政治にかかわったとしても、宗教の公的な側面、ないし市民宗教の概念に提示されるような普遍的、公的な基準を全面的に否定することはできない。宗教家ないし宗教団体が行う政治活動も、アメリカの存立を保障する倫理的、道義的、公的な宗教的次元、ないし固有の神話と儀礼によって象徴化されているアメリカの市民宗教による超越的な次元での制御を逸脱することはできない。

情報化時代のアメリカの宗教は、体制化した主流のベラリズムにせよ、新たに力を得はじめている反体制、反主流のファンダメンタリズムにせよ、政治的発言を積極的に行い、政治活動に大きくかわるようになっていく。それは宗教集団もまた、政治勢力と同じように、脱規格化が進み、複数の認識が共存する状況になっている

ことのあらわれである。しかも一方では、政治勢力の一つとしてではなく、アメリカ人の政治倫理、公的生活の

共通の道義的基準としての宗教的次元の存在が認識されている。同じ宗教という表現のもとに、一方では、私的な市民としての権利の行使として宗教家が政治に参画するという現象が生まれ、また一方では、アメリカ人の公的生活の道義的責任の基準としての宗教的次元、市民宗教が存在し、機能している。

いまや情報化時代に入ったアメリカは、第三の波という文明史上の一大転機にある。しかしこの新たな文明状況のもとでも、トフラーも認めているとおり、「きたるべき明日の文明にむかつて、満ち足りた情緒生活と健全な精神的体系をつくりだすために、人間はだれでも、三つの基本的条件があるということを理解しなければならぬ。それは、共同体への帰属意識と、社会の構造的な認識、そして人生の意味の把握という三つの条件である。第二の波によってもたらされた社会の崩壊によって、これら三つの土台が侵食されてしまったということを理解することから、われわれ自身、およびわれわれの子孫

のために、より健全な精神的環境を設計する手がかりがえられる」⁽¹²⁾ ことに変わりはない。

ひるがえってアメリカの情報化時代を鳥瞰すると、産業段階の第二の波の頂点を象徴化した三大ネットワーク・テレビを中心とするマスメディアによる情報の寡占的支配が終りに向かい、メディアの多様化、情報の脱規格化が着々と進んでいる。こうした状況のもとで、キリスト教国アメリカの主流知識人のリベラリズムないし世俗的ヒューマニズムによる価値の独占もまた大きく揺らいでしまった。そこに、精神分析とか、東洋伝来の神秘的宗教とか、性的実験、遊戯療法、古くからの信仰復興運動などが一九五〇年代から大衆に浸透し、流行した。同時に新興宗教が隆盛になり、大掛かりに資金を集めたり、熱心に会員を勧誘して全国に広がっていった。より一層注目すべきものに、キリスト教の福音運動があり、ことに対象を低学歴、低所得層にしぼって、独占的なメディア、テレビジョン、の多様化の動向を巧みに活用したテレヴァンジェリストたちによるポーンアゲイン運動が、急速にその規模を拡大したのである。

テレビの普及と新しい宗教運動という面から日米両国の展開を並列的にふりかえってみると、興味深い事実がいくつか浮かびあがってくる。わが国でテレビ時代が幕をあげたのは、一九五三年であって、NHKが同年二月一日に、NTVが同年八月二十八日に本放送を始めたのである。一方この頃は、アメリカでは、三大ネットワークのテレビが隆盛を極める最中であつたが、同じ一九五三年に、いわゆるテレヴァンジェリストのレックス・ハンバードの放送が開始されていた。

また宗教運動の展開という面から振り返ってみると、わが国の巨大新宗教運動、創価学会、立正佼成会などが急成長をとげたのは、一九五〇―五三年の朝鮮戦争にとまなう特需による産業の活性化に起因する、農村から都市への人口の急激な流入と軌を一にしていたとも考えられる。またわが国でこれらの新宗教運動が政治に進出しはじめたのも、五〇年代以降の社会変動期であつた。アメリカのテレビ教会の成長とわが国の新宗教運動の組織的急展開は、太平洋をこえた二つの情報化社会で、手法こそ違え、同時並行的に進展していただのである。

註

- (1) アルビン・トフラー『第三の文明』（東京、日本放送出版協会、昭和五十五年、二五―二六、八―九頁）
- (2) トフラー、前掲書（二一九―二三三頁）
- (3) デビッド・ハルバースタム『メディアの権力』（東京、サイマル出版会、一九八三年上、一一―二五頁）
- (4) ハルバースタム、前掲書（上、二二五―二二八、二四八頁）
- (5) Peter G. Horsfield, *Religious Television The American Experience*, White Plains, N. Y., Longman, 1984.
- (6) Jeffrey K. Hadden and Charles Swann, *Prime Time Preachers, The Rising Power of Televangelism*, Reading, Mass., Addison-Wesley, 1981.
- (7) Horsfield, ditto.
- (8) A. James Reichley, *Religion in American Public Life*, Washington, D. C., The Brookings Institution, 1985.
- (9) 佐々木毅『現代アメリカの保守主義』（東京、岩波書店、一九八四年、一〇七―一〇八頁）
- (10) 佐々木、前掲書（一四〇―一四二頁）
- (11) ロバート・N・ベラー『アメリカの市民宗教』『社会変革と宗教倫理』（東京、未来社、一九七三年、三四―三七五頁。原文はDaedalus、一九六六年に発表）
- (12) トフラー、前掲書（五二三頁）

（あへよしや・愛知学院大学教授）